

座談会

LEC会計大学院で学んで

～LEC会計大学院在學生との座談会～



(後列左から) 山川氏、結城氏、大賀氏

(前列左から) 山本先生、諸井先生、岸野氏

(敬称略)

LEC 会計大学院 2006 年度入学生

大賀 和彦

LEC 会計大学院 2007 年度入学生

岸野 有紀

LEC 会計大学院 2007 年度入学生

山川 恵次

LEC 会計大学院 2007 年度入学生

結城 邦博

LEC 会計大学院教授

諸井 勝之助

(司会) LEC 会計大学院講師

山本 宣明

編集委員会ではかねて卒業生もしくは在學生との座談会を企画しており、今回その第1回が実現する運びとなりました。集ったのは現役の院生諸君4名、司会役の山本講師、それに諸井の計6名です。あらかじめ詳しい打合わせなどせず、各自思うことを自由かつ率直に語り合っ、結構楽しい座談会となりました。開催日は2008年9月21日(日)です。(諸井)

1. LEC会計大学院で学ぶまでの道程

山本 では諸井先生を囲んで第1回目の会計大学院生座談会を始めたいと思います。特にテーマを限定するということはなく、LEC会計大学院で学んで今、感じていらっしゃることなどをざくばらんに語り合っていきたいと思います。と言っても、何もないでは話が始まらないかもしれないので、まず私の方から伺ってみたいと思うのですが。LEC会計大学院はその主要メンバーのほとんどが社会人もしくは社会経験を経て院生として勉強されています。皆さんがどのようにして会計と出会い、大学院まで通おうと思うようになったのか、大変興味があります。また、実際に学んできた中で、いま会計について思うこと、会計大学院に対して思うこと、LECについて思うことなどお聞かせ願えればと思います。よろしくお願い致します。

諸井 どうぞ気楽に(笑)

山川 私の場合は公認会計士を目指してLEC会計大学院に入りました。大学の学部時代、十年ほど前に経営学科で会計に触れて、当時、会計自体が何かはあまりよく分からなかったのですが、数字の持つ意味に説得力があるなと感じていました。公務員であった当時、数字に対する矛盾を少なからず感じていたこともあって、様々な数字で表される会計という世界に惹かれ、徐々に強く意識するようになりました。その延長線上に会計士があつて、多数の著名な先生方をはじめ実務家の先生方のご教授を受け質の高い実務を含めた会計を学びたいと考え、北海道からLEC会計大学院で学ぶために、そして広く機会を求めて東京へ出てきたという感じです。

諸井 先日、北海道へ行ってきました。旭山動物園にも(笑)。函館に二泊、夜景が良かった。食事しながら眺める夜景がとても良くて。あその



夜景は世界一だね。

岸野 私、兄が旭川にいます。先日、動物園にも行きました。

山本 あ、では、岸野さん、流れでお願いします。

岸野 私は大学で会計や経済が関係ない学部でした。就職時に経済に関わる仕事に進みたくて戦略系コンサル会社のいくつかに就職活動してみたのですが、そこでは何らかの専門知識を必要としていて、そのため会計士の資格等の取得を考えるなど試行錯誤し、最終的に会計事務所系のコンサル会社に入りました。仕事を始めて実際の会計と出会い、連結等の財務諸表を作る業務に携わりました。業務上、財務諸表はシステムでボタンを押せば出来てしまうので、ロジックを知っていてどうということはなかったのですが、2年くらい前に内部統制等がブームになり、私の会社もそちらのビジネスに進出し、私自身も携わる機会がありました。その時に会計士のニーズが高まっていることを感じて、プロジェクトを通じて、もう一度勉強しようと思うようになりました。

私が財務諸表の作成に携わった当時は、連結のキャッシュフローも税効果もなく、かなりシンプルでした。

諸井 海外の通貨が違うようなところを連結するのは大変でしょうね。海外子会社の監査なんか、どうやっているのか興味があります。やはり現地の会計事務所等に頼むの？

結城 現地のBig4の事務所から入ってやっています。

諸井 トヨタなど、ものすごい数の海外子会社の監査はどうやっているのですかね？ま、そんなことも含めて、ざっくばらんに話していきましょう。

山本 では、結城さんお願いします。

結城 大学生の時は物理を専攻していまして、社会に出て何をやるかということは考えていなかったのですが、研究職は向いていないと思っていました。当時まだバブルの頃で金融はわりと理系を取ってくれるところもあって、銀行に入りました。銀行に入ると勝手が違い、融資等で財務分析などをやり、また、当時デリバティブ等がはやりだした頃で、自分で勉強しました。その頃はまだ会計に興味はなかったのですが、アメリカのビジネススクールで学ぶ機会に恵まれ、そこでビジネスは微分積分の世界ではないかと感じるようになりました。周りに会計士資格を持っている人がいたり、会計事務所へ入るといふ人がいたりして、次第に会計を身近にかんじるようになりましたが、当時はまだ自分はそちらに身を置く気はありませんでした。帰国後、事業会社に転職し、仕事をしていく上で、管理会計が必要となり、その中であらためて簿記の必要性を感じ、会計を勉強し始めました。それでもシステムをのぞいてみるとTアカウントが出てきたりして、多少はわかるが本質的に身につけていないのでわからない。税金についても、キャッシュが海外から入金されると源泉税を抜かれたりするが、なぜ抜かれるの

かさっぱりわからない。そういう疑問がいろいろ生じるようになりました。その後、内部統制の仕事をするようになって、クライアントの財務や決算に関わるようになり、ちゃんとやらなければいけないと実感するも、何を勉強したらいいかわからない状態が続きました。会計士の勉強をするも、資格のための勉強では駄目で、網羅的にどこかで先生に教わらないと本当にはわからないということを実感して、いろいろ調べたら会計大学院が最近出来たことを知りました。仕事をしているので、土日と平日夜で通えるところでもあり、昨年からお世話になっています。

山本 ありがとうございます。では、大賀さんお願いします。

大賀 私はシステム系の仕事をいまして、販売・在庫管理のシステムに関わったこともあって、仕訳の簡単なところはある程度やっていました。大学院に入ろうと思ったきっかけは2年くらい前のJ-SOXの話題が盛り上がった時です。それまでは情報セキュリティのコンサルをやっていたのですが、それだけだと商売が広がってこなくなっていて、内部統制、セキュリティを含めたIT統制が商売になるのではないかと思い、勉強してみようと思いました。ですが、内部統制？何だそれ？からはじまり、一向に訳が分かりませんでした。独学で勉強しようにも何を読めば良いかすら、まずわからないと。それでいろいろ調べたら、会計大学院というのがあって、内部統制なんかも扱っている、ちょっと行ってみようかと思った訳です。それまで会計自体を勉強しようと思ったことは正直、あまりなく、システム関係で簿記くらいは少々勉強したことがありましたが、販売・在庫管理系のシステムだとそれ以上のことは求められることもありませんでした。

2. LECでの勉強

諸井 大賀さんと結城さんは会社勤めですか。会社勤めで勉強するのは大変でしょう。会社の人には理解してくれていますか？

結城 私の会社は会計士の資格を持っている人間が多く、そういう勉強は基本的にはどんどんやってくださいというスタンスで、非常に理解されています。仕事に直接的に反映されるので、やっている仕事と仕事の割り振りで、今まで回ってこなかった決算の仕事が回ってきたりしています。

諸井 大賀さんは？

大賀 理解があるわけではなく、「今日はこれで帰ります」といって出てくるしかないです。お客さんとの打ち合わせとかがあると、なかなか来られず、欠席率は高いです。

諸井 うちはビデオを撮っていますね。

山本 はい。ビデオは重要な役割を果たしています。

結城 最近、他大も始めたらしいらしいです。私は特に1、2年目は非常に助けられました。半分くらい来られない授業もありましたが、週末にビデオでフォローできました。

諸井 ビデオがあるからという訳ではありませんが、私は講義の準備にはかなり時間をかけています。よく分かっているつもりでも、少し前もって再考して講義に臨んでいます。「ファイナンスの全体構造」は当初は8回だったのですが、15回にしました。毎回、必ず最初の15分は前回の復習をするようにしています。この方法なら学生の理解度も高まりますから、これからもそういう方式で続けていこうと思っています。また、大学院である以上、教員は研究活動をしっかりやらなければならない。その為にも、ジャーナルをきちんと出さなければならないという思いから、紀要を出すこ



とを提案し、大いに賛同を得てここまでできています。少し観点は変わりますが、戦前を思い出すと日本民族のエネルギーを感じます。先人の苦勞を偲んで志を立てて勉強して頂きたい。LECに来てくださった方は、それぞれ志を立ててこられたと思います。大いに勉強してそれを将来に生かして下さい。戦前、戦中、戦後、日本人がいかにかに苦勞したか。それにしても、LECの先生は年配の先生方も実務家の先生方も自信を持ってやっておられる。普通、大学の先生というのは必ずしも一つにまとまらない。お互い思いがみ合って足を引っ張る。そういう風潮がどうしてもできる。ここはそれがない。それがLECの非常に良い点だと思う。皆さんが自信を持っていて、それでいて自慢高慢はしないで前向きで建設的。それが非常に良い。

大賀 正直、LEC 会計大学院で初めて先生というものを尊敬しました。

諸井 人生というのは突如として変わるものです。その意味では、LEC 会計大学院が刺激を与え

て、若い方にプラスに作用すれば良いと思う。

岸野 仕事だけやっていると、本に触れたり自分で考えたりすることが出来なくなってくる。そういう時間がなくなってきました。LEC 会計大学院に来て授業を受けて、知的好奇心が非常に刺激を受けました。

諸井 知的好奇心が刺激されると集中できる。集中して本を読んだり、集中してものを考えたりすることはすごく大事です。他のことが気になると駄目。私も他事が気になって、論文なんかも書き始めは集中できない。雪が積もる時、最初のうちは溶けてしまう。だけど、だんだんいつか根雪になって積もっていく。そうなると論文なんかも早い。

3. ビジネス・シミュレーション

山本 LEC 会計大学院オリジナルの「ビジネス・シミュレーションⅡ」がちょうど終わったところなので、少しその話題に触れていきたいと思います。今回は製造業を想定して、1人1社を担当ということで行いました。大賀さんと山川さんには今回、御参加頂いています。

大賀 正直、あまり期待していなかったというか、従来のシミュレーションの域を超えていないのではないかと思っていました。しかし実際受けてみると、製造業の経営に関わることの全てが備わっていました。それこそ原価計算から会計以外のことも考えなければならない。販売員の確保とか。時間的にも制約があって、時間内で意思決定をしなければならないのですが、実際、在庫管理を計算するだけでも1時間かかりました。

山本 このシミュレーションでは、予定したものに対して利益がどのくらい出ているか等で評価されるのですが、今回は過去最高の利益水準を達成していて、皆さん素晴らしい成績でした。ちなみ

に、今回は製造業のオペレーションに関わるシミュレーションでしたが、Ⅲでは財務の問題も入ってくるようです。

山川 このシミュレーションには、市場原理が面白いほど活かされているので、今度はサブプライムのような問題が起きるかも知れないですね(笑)

山本 ビジネス・シミュレーションは意外にその人の性格が出ますね。

大賀 自分でもびっくりしました。

山本 大賀さんはしたたかにいろんなものを仕込んで積極的に売上の増大を図る。山川さんは周りの状況を読みながら中道で行くという感じでしたかね。(笑)

諸井 通常は複数の人で1社を持つのでしょうか？

山本 はい。通常は3人一組で、それぞれ CEO、CFO、CMO という役につきます。社長として全体を見る人。財務責任者という立場で見る人。営業責任者という立場で見る人という役割をそれぞれが受け持つこととなります。今回はそれを全部1人で意思決定しました。

山川 ワンマンだったので、意思決定は早かったと思います。(笑)

山本 大賀さんがエクセルでシミュレートして意思決定しているのがすごかったです。市場の動向から販売予測をして売上高を予測し、在庫管理をされていました。

大賀 生産が追いつかなかったのは、そのエクセルのバグだったのかな？(笑)

山本 お二人とも理想的なラインまで達しておられたと思います。

山川 原価計算を勉強してきたのが、かなり活きたと思います。このシミュレーションでは、販売員数から最終的な売上高を予測していくというのが本来の順序なのですが、自分是在庫から積み上げていき最終的に製造数量から販売員数を導き出す戦術に出ました。それは原価計算の考え方

が知識としてあったので実践できたことです。結果的に、限られた時間のなかで経営者は意思決定してあらゆる予測を立てて企業活動を行なっているんだ、ということを感じてきた大変有意義な授業でした。

山本 従来のものとは比べ物にならない完成度だとやればやる程、分かります。それにしても、これは小林健吾先生が大変な思いをして作られているということは、強調しても強調し過ぎではないと思います。もちろん金井浄先生や高田博行先生の実務家の先生方の強力なサポートがあってこそ発展している訳ではありますが、教員がチームの体制を組んで進めている点も大きいと思います。

大賀 進行役の高田先生がいろいろとお話をされて、その中にヒントがあって、自分に必要なものを探る。そこで経営的手腕が試されている気がしました。

諸井 そういう先生方の努力があって、初めて可能になっているのですよね。こういう授業を大学院でやっているところは、なかなか無いのではないですか。これは今後、LEC 会計大学院の看板科目になるでしょう。

山本 はい。あれだけのものはどこにもないと思います。今後、外部機関とも協力して広く展開していく予定です。

4. LECへ来て良かったか

諸井 論文指導は如何ですか？

岸野 週1回受けています。私のゼミは人数が多くて(15 人くらい)、基本書を熟読して担当者が報告する形式で進めています。

諸井 税理士試験の免除を目指しているものもあるため、厳しくやっていると伺っています。



岸野 テーマも簿記論や監査論など、税理士試験に関連するものの中で選んだりしています。企業結合などについて国際会計基準と日本の基準を比較するようなものが多いと感じます。

諸井 税理士を目指している方はどのくらい、いらっしゃるのですか？

山本 今年の1年生にはけっこういらっしゃる印象を持っています。

諸井 公認会計士試験の方はどうですか？

岸野 今年は駄目だったのですが、来年、免除をいただいて負担を軽くして再挑戦したいと思っています。修了生の方は結構皆さんパスされている印象があります。

山本 短答式で1科目に集中出来るのがやはり大きいようですね。

結城 試験のこともそうですが、LEC に来て本当に良かったと思います。10 年前も勉強する機会があったのですが、当時から、10 年後くらいにもう一度勉強しようと思っていました。普通は専門を勉強した後、もっと一般的なことを勉強するのかもしれませんが、今、会計、監査、租税法といっ

た専門を勉強するのがすごく新鮮で、私は今になって専門の本を読むことがすごく楽しく、嬉しい。先生方から刺激も受けています。

諸井 貴重な時間なんですよ。今、世の中の動きは速い。LEC で教えて若い方々と触れるようになって、新聞を丁寧に読むようになりました。知的好奇心が刺激され、様々なことに関心を持つようになって、ついつい夜更かししてしまうんです。

岸野 社会に出てからもう一度学ばせてもらう場が LEC の大学院であったことは幸せなことだと思っています。

諸井 相当なお金と時間をかけて勉強されるわけなので、それを大いに上回る成果をあげるよう、大いに頑張ってください。こちらにもそれに応えられるように一生懸命やりたいと思っています。どんどん世の中は動いていくので、それに追従できるように、前向きにカリキュラムも改めていきたいと思っています。

岸野 卒業してから安く聴講できれば良いなと思うのですが。

結城 今は入学金だけ割引になるようですね。

山本 その点は今後、考えていく必要があると感じます。

岸野 あと、自習室にインターネット環境があると良いなと思います。

山本 それも要検討事項ですね。自習室と言えば、山川さんは何時も主のようにいらっしゃいますね。本当よく使われています。

山川 各々にあった時間管理をおこなって、規則正しい生活ができた延長線上に良い勉強のスタイルがあるのではないかと考え、自らを律する気持ちを持て強くて日々の生活を作っています。

山本 いつも大体何時にいらっしゃってるんですか？

山川 今はライセンスの授業が持ち運びやすい

DVD 等に収録されているので、ある意味どこでも学習できるようになっています。朝いつも家で1個メディアをみて、午前中に計算系の問題を解いて、午後からは自習室で勉強しています。いまは、1日 10 時間以上勉強することを自分に課しています。年間 3,000 時間を超えると何かが見えてくるらしいという話を聞き、頑張っているところですが、でも、本当に集中していられる時間というのは、実質 3~4 時間なんですよ。あとの 6 時間は集中している時間に比べると、2 倍くらいの時間がかかっているような感じなので、効率的な勉強法が必要なのでしょうね。

山本 やはり勉強量は必要でしょうね。質の向上を図る意味でも量的な蓄積が無いとなかなか難しいのではないかと思います。

山川 もともと勉強は一人でするものだと思いますが、勉強仲間は大切ですね。もっと自習室で“カリカリ”勉強している人が沢山いてくれるとモチベーションも保てていいですね。いろいろな部分でバランスをとるのが難しいですが、勉強に集中しやすい環境づくりが重要だと思います。

諸井 自習室というのはどんな感じになっているの？

岸野 だだっ広い、普通の教室みたいなおところで自習できるようになっています。

諸井 やっぱり勉強する場所は慣れて落ち着いたところが良いですね。慣れたところじゃないと気が散っちゃって。図書館の閲覧室なんかでも、みんなが熱心に読んでいると、そういう雰囲気につられて読みますよね。

山本 緊張感のある雰囲気が必要なんですね。

諸井 あと、負けなぞ！と思わなきゃね。良い意味での負けず嫌いというのが大事です。

結城 家だと子供も犬もいて、書斎があつて机があるわけでもないの、時間と場所を見つけるというのが難しい。電車の中が一番良くて、そこを

軸に学校へ来たりして勉強しています。

山本 電車って集中できますよね。自宅だとだらだらしてしまうのが、電車だとやけに集中できるという感じがする。

山川 東京に出てきたばかりのときは、東京のスピードの速さに圧倒されていたせいか、特に電車の中が落ち着かなかったですね。慣れるまでにはかなりの時間がかかりましたが、いつの間にか慣れてしまい電車の中でも自分の時間が持てるようになりました。いまは、どんな時間でも大切にすることを常に意識するようにしています。

5. 諸井教授大いに語る

諸井 皆さんの健康状態は良い？皆さん 30 代？

全員 (皆で相づちを打ちながら)30 代～40 代です。

諸井 僕は昭和の年号より一つ年上なんですよ。40 代は本当に嫌な時代だった。大学紛争があったから。あのときは大学の先生を辞めようかとさえ思った。会社にでも入るときやよかったかな、と。精神衛生にすごく悪いんですよ。40 代の中程くらいになると、管理職の候補者になってしまう。だから、誰がババを引くかということになっちゃうんですよ。ババ引いて学部長になんかなっちゃうたら矢面に立って大変なんですよ。一生というのは何が起きるか分かりませんね。一番嫌だったのは昭和 46 年の秋でしたか。そのとき学部長と評議員が二人いて、僕は専任評議員だったんですよ。で、学部長は財政学の先生で、もう一人の評議員は小宮隆太郎さん。教授会がこれから始まるというので学部長室で事前の打ち合わせをやっていたんですよ。そうしたら、そこに共闘系の連中が押し入ってきて、ドアを蹴破って入ってくるんですよ。それで学部長室と教授会室の間のロビーに連れ出されて、昼の 12 時半から夜



の 8 時まで団交。最後は結局ドクターストップですよ。血圧を測って。そのときは本当に嫌だった。大学紛争は決して懐かしくないね。だけどね、海軍は懐かしいんですよ、不思議に。皆さんもまだ 30 代、40 代だとすれば、僕の年になるまでまだ 40 年くらいかかる。何が起きるか分かりませんよ、ほんとに人生って。それがおもしろいんですよ、済んでしまえば。

【大賀さんお仕事の関係で退席】

山川 今はこの先に対する恐怖感みたいなものを感じることも多いですね。

諸井 向こうから黒雲がやってきそうで、これから先どうなるんだろう、という、近い将来に対する不安というのは一番こたえますよ。それが頭の上でドンパチやり出すと、今度は「何を！！」という気が起きるんです。僕の経験からすればそうです。大学紛争時に東大の院生たちとやりあった時はまさにそういう状況で、そのときは「コノヤロー」っ

てなもんで怖くないんです。ただ、行政職の任務に就かされた時はすごく不安でした。自分にできるだろうかと逃げ出したくなっちゃう。ドンパチ始まったら、これは大丈夫だと。そういうものですよ。やっぱり生き物の本能みたいなのが出てきて、ここでしっかりやらないと、って。共闘は私に一目置いていたみたいです。

山本 先生が海軍で鍛えられているということ、相手も分かったんじゃないですか。骨があるって。

諸井 どこか共闘と共通するものがあった(一同笑)。海軍って良いですよ。海軍では終戦になってから本当の仕事が待っていました。民間に対して未払い金があったんです。それを精算して解散しようということになったので、その処理が大変だった。鹿児島に経理部があって、鹿児島まで行って、大金を預かって宮崎に帰って支払いをやった。一度、大金をもったまま最終列車を逃して、都城駅で夜を明かしたこともあった。当時、鹿児島の経理部の主任が「海軍は負けたら金も払わずに逃亡したなんて絶対言われるな、払うべきものはきちんと払おう。」と言ったが、私も大賛成で努力しました。かなり支払いは済んでいたんだけど、みかん畑を軍用地にしたのにみかん畑の補償ができていないとか、杉や松をいくつも伐採しながら代金を払っていないとか、複雑だよな。

山川 戦時中ならば当然に お国のために全ての財産を差し出す、というイメージだったのですが、すべてがそういうわけではなかったんですね。

諸井 そういう契約になっていれば別だけど、そうでなければ、払うべきものは払わなきゃいかんよね。それで 10 月の末までやりましたよ。あれでインフレになったかな、と思った。だけど、海軍は払うべきものも払わずに逃亡したと思われるのは嫌だからね。お国のためにさしあげたのだから要

りません、というのは、敗戦後は言わないよ。戦時中ならまだしも、負けたんですよ。無条件降伏したんです。がらっと考え方は変わる。僕が海軍でやった主な仕事はその残務整理なんです。それもやっぱり会計と関係あるもんね、経理だよ。不思議なご縁だと思います。今でも経理学校の同じ分隊の集まりはあるんですよ。15、6 人くらい集まります。

山本 先生は主計少尉としてそのような任務に就かれていたわけですが、戦争と原価計算の関連についてのお話はとても興味深いです。いわゆる軍部が原価監査を取引会社に対して徹底的に行っていたことが、原価管理の普及と向上に繋がったというお話なのですが、先生から戦争時代の様々なエピソードを伺う度に、あの時代にその勢いで原価監査が現場に対して行われていたというのは、それはやっぱり原価計算が根付くわけだなと思います。

諸井 そう。お上が「やれ！」と言ったらね、「はは一つ」とこう、やるわけですよ。

山本 すさまじいですね。

諸井 日本人は、お上がやれて言わないとやらないんですよ。法律にしないと駄目なんです。法治国家ということなんでしょうけど。会計もそうです。そう考えると面白いんです。会計なんて無味乾燥だ、なんて思わないでね。

山本 単なる技術論にとどまるのではなく、社会の動きや歴史と関連させて会計を理解することが大事だということですね。先程、論文指導についての話題もあったのですが、岸野さんは若杉先生の下で修士論文を作成されています。たしか研究テーマは包括利益と伺っています。

諸井 包括利益というのは何を包括しているの？

岸野 各国の会計基準によって多少差があるようですけども、日本の場合だとその他有価証券の評価差額や為替やデリバティブのヘッジ損益

などです、イギリスの場合はそれに固定資産の評価損益も含まれてきます。

諸井 そうなのが企業価値に影響を及ぼす。

岸野 そうですね。純利益と包括利益のいずれが企業価値とどのような関連があるか、というような研究は多くあります。

諸井 当期の業績そのものとは違うものが混ざるということですね。当期業績主義とは対立する。会計原則は従来、当期業績主義なんです。黒澤さんは包括主義には反対していた。僕はその頃から包括主義というのは企業価値と関係があるのではないかと、ファイナンスの方からすると、包括主義の方がベターじゃないかと。マーケットはそれも合わせて評価すると思ったからね。だけど企業の立場からすると、企業の今期の業績を純正化すると当期純利益になるんですね。私はそのように理解しています。

山川 そうですね。将来の実現の可能性が高いものはすべて含めようというのが包括的利益概念ですから、見え方も捉え方も異なりますよね。

諸井 僕は前から包括主義の方がいいんじゃない



かと思っている。その方が投資家に対する情報としてはベターじゃないかと。だけど、企業の経営者にとってみれば、ちょっと異物なんですね。

岸野 だからという訳ではありませんが、当期純利益の重要性を主張するものも結構あります。フロー情報としての純利益の有用性は依然として高いという考えですね。

諸井 その考え方は大いにあると思う。どっちの主張も十分な理由があるね。どっちかで決めなきゃいけないということになると難しいんですよ。

山川 未来的な価値判断の割引率や回収可能性の適確な判断等のように、実際目に見えない予測の域を超えない部分に恣意性が介入します。そして、その判断に経営者によって偏りが出てしまうのが気になります。これまでの当期純利益で計算されてきたものと、包括利益で計算されるものの違いは最低限理解していないといけないと思います。

諸井 僕は両方知っておいた方がいいと思います。ルールとしてどちらか一つに決めなきゃいけないとなると難しい。会計原則の初期は当期業績主義だと思いますが、僕は包括主義に興味を持っていて、マーケットはそれで評価するんじゃないかという感じをもっていた。

岸野 実証研究には、経営者の裁量の余地がどちらが入りやすいとか、そういうことを検証している論文もあります。

諸井 その点も重要だね。よく分かります。不純物が入る余地があるんだね。論文って難しいですよ。少し古いところも調べてみてください。歴史を知ることはとても大事ですから。

山本 そういう意味では、会計って非常にたくさんの論点がありますね。

諸井 管理会計だと法律と結びつかない。会社ごとに役に立つようにやりなさい、で良いんだと思う。財務会計ではそうはいかないけどね。

山本 財務会計のやり方が「会計」だということで、そのまま経営管理に持ち込まれたりするとゆがみますね。いろんなものが。

諸井 それはやっぱり違うんだよね。

山本 最近では四半期決算が入ってきて、四半期業績を最大化するためにいろんなものを調整するというのは、結構やられているだろうと思います。

結城 現実には四半期の決算があるので、四半期の売り上げと利益をターゲットにして現場が動かされるので。前にいた米系 PC メーカーではそれが極端だったと思いますが、どうしても現場が近視眼的な見方しかしなくなってしまう。全く、戦略的にものを考えられない。

岸野 昔、財管一致ということが言われてましたが、そういうところにしわ寄せがいつているのかもしれないですね。

山本 財務会計の方から機械的に落とし込んでくると、そういう弊害が出てきますよね。もっと管理会計上の運用を考えないといけない部分が多分にあると思います。

諸井 例えば海外子会社を管理する場合、外貨建てで管理するか、邦貨建て、円になおして管理するかで全然違うでしょ。そうすると、円になおすと評価差損益が出てくる、それを含めて業績を評価するのかしいのか、というのを、どうしているんだろうというのが興味ありますね。

結城 私がいた PC メーカーは、最初に円で評価してそれをドル転して必ず両方を見てやっていました。最終的な評価はドルですが、そこで差が出たのはちゃんと認識する。今の会社は、日本が子会社なのでドルでしか作らない。そうすると円でどうだったかが分からない。まったく円のトレンドもわからないし、ドルでしか見られない。為替の影響がどれくらいあって、ということも分からない。管理会計的に分からないんですよ。

諸井 今みたいにレートがよく動いていると困りますね。1日違いでがくつと違う。そういう意味では為替の問題は重要だと思うんですよ。現地通貨で子会社を評価するか、円に直して評価するかでまるで逆になることもある。それはアメリカの国際ファイナンスの教科書でもとりあげられているんです。そういうのを、いろんな会社へ聞きに行っても面白いんじゃないですか。あと、国際ファイナンスで問題が残っているのは Multinational Capital Budgeting ですね。どうやって海外に子会社を出すか、その意思決定をどうやってやるかは、かなりやっかいですよ。これで論文を書いたらドクターを取れるんじゃないかな。例えば日本と中国を取り上げて、日本だけだったら 10 億投資して年々のキャッシュフローがどうなっているのは比較的簡単にらせるけど、海外の場合には円のインフレ率と相手国のインフレ率が同じならいいけど実際は違うでしょ。そういうのとか、金利がどういふ風に違うか、とか、資本コストをどうするか、とか。何年投資をしてストップするか。アメリカの事例だとだいたい 5 年くらいで処分しちゃう。それから、税制がどう違うか。海外子会社から送金してくる、配当してくる、それに対する税率が日本ではどうか、向こうではどうか。カントリーリスクもある。考えれば考える程いろんな問題がある。そういうのを整理して、日本の事例も調べられればよい論文になりますよ。だけど、難しいよ、そういうのは。アメリカの教科書には書いてあるけど扱分野が広がるからね。例えば、トヨタなんかどうやって海外子会社の意思決定をしているか知りたいですね。そんな計算はしてなくて、他社がやっているからうちも、ということかもしれないけど、そうじゃないと思うんですよ。ああいうところは先をよく見通して、注意事項もいろいろ考えてやっけるに違いないと思うんですよ。そういう重要な意思決定をただ直感でやっける

るはずはない。かなり細かく分析してやっていると思う。そういうのは、国際ファイナンス、あるいは国際管理会計、国際経営論と、いろんな分野にまたがりますね。

山川 今、院の授業のなかで M&A に大変興味を持っています。日本企業間での M&A は当然ですが、海外の企業も含めたものにも。そこには様々な分野のスキルが必要なんですよ。

諸井 M&A は加納先生が担当されていますね。加納先生の授業はどうですか？

岸野 面白いと評判ですね。

山本 加納先生のお話ですと、M&A とかで企業評価というものがかかなり雑にされているということらしいです。雑でも M&A 自体は成立しているらしいのですが、理論的にはかなりおかしなものが存在すると。これは恐らく会計士になっている人でも、ファイナンスのことというのは、何故そうなのか、ということあまり問わないで業務に臨まざるを得ないところにも原因があると思います。

諸井 古くに会計士の資格を取った方は、よく勉強していないと最近のことは分からないですよ。まるで変わっているもんね。そういう人が監査したら間違った監査をしちゃうんじゃないかな。古いルールに従って監査したら駄目でしょ。しょっちゅう勉強し続けないと。

岸野 一生やり続けたいといけませんね。

諸井 そうそう。生涯学習ですよ。今みたいに変化する時代はそうだと思います。年取ってなんかいられないよ。

山本 先生が以前に、伝統的な会計学というのは時間価値を考慮していない、とおっしゃっていましたが、それは財務会計もそうですが管理会計の世界でもやはり重要な問題だと感じます。

諸井 やることはたくさんありすぎてキリがないよ。だから学者商売ができるんですよ。論文が書け



るんです。

山本 原価計算や原価管理も、時間価値を入れるともっと面白くなると思いますが。

諸井 時間価値を入れないというのはやっぱりよくないですよ。ファイナンスはそこから始まるわけですからね。

山川 先生がもし今この時代に、僕たちの年代だとしたら、何をやりたいですか？

諸井 う〜ん、そうねえ、やっぱり歴史は興味がありますね。だけど、国際ファイナンスなんかやりたいね。トヨタの海外子会社でも全部まわって。どうやって決めたんですか、とか、どういう問題があるんですか、とか、聞きたいですね。世界各地にあるんですよ。みんな成功しているのかな？と思いますね。自動車も少し斜陽になりつつありますからね。ですから少し足で調べられたら、と思いますね。そのためには若さが必要。例えば、カントリーリスクなんかはどう考えるのかな？ 共産化したとか、全部国営化するということもあり得るわけで。進出した会社が全部とられちゃうという歴史をアメリカは持ってるんだよね。いろいろなところ

に進出すればそういう問題も起きますよね。革命が起きたりもする。もし若返ったなら、会計とかファイナンスといった狭い範囲よりも少し広げて、大きな経営とか国際問題とか、あるいは経営者論とか、そういうものと結びつけて議論したら面白いんじゃないかなと思います。一種の文化ですから。同じ会計と言ったって。アメリカと日本ではずいぶん違うわけですから、利益は誰のものかといっても答えは必ずしも同じではないでしょ？

山本 今、グローバル化ということで、一元化するという方向にベクトルが、かなり向いているという気もします。

諸井 だけど、そう簡単に利益準備金なんかも廃止しない。あれは株主のものじゃないですよ。あれはやっぱり日本の資本蓄積が乏しかった時代の名残です。そういう歴史を引きずっている。内部留保はいいことであり、配当は悪いことである、みたいな頭があるんですよ。それは戦時中が一番そうだったんですよ。工場なんかは軍艦を造ったり飛行機を作ったりする製造の場でしょ。そういうところは財政状態がきちんとしていなきゃいけないので、「配当なんかするな、留保しろ、留保しろ」と言っているわけですからね。それはやっぱり資本蓄積が乏しかったからそうなる。それで、間接金融が戦後強く出てきたのはそのためですよ。蓄積がないんだから必要な資金は銀行が面倒を見る。そして、銀行に金がなければ日銀が銀行に金を出す、とかね。それでオーバー・ローン、オーバー・ボロウイングが始まっていくんですよ。だから、昭和 20~30 年代の財務諸表を見ると、製造企業の自己資本比率というのはうんと小さいんです。だから会社は株主のものじゃないということになっちゃうんですよ。金融機関が持っているようなもの、ということになっちゃう。あるいは国営化に近づいているような。

昔、昭和 26 年に八幡製鉄を見に行っただですよ。戦後まだ6年しか経っていない。八幡製鉄は古いやり方で鉄を作る、昔のスタイルが残っていた。それからその足で、今度は姫路の近くの広畑に行き、富士製鉄を見た。そこはすごい近代化されているんですよ。圧延機から真っ赤な鉄がうわーっと走り出してくる。それを見て、こんな素晴らしい設備があるのかとビックリした。それも、そういう設備を入れる資金、また、そういう設備を入れるためのいろいろな世話を国がやってくれるんですね。通産省とか大蔵省、日銀が面倒みている。そうでなきゃ、そういうのは入らないですよ。だから護送船団方式だなんて言われるんだけど。そういうのを経てきているわけです。だから、株主なんて弱いんだよね。その方式で日本は成功したので、一度成功した方式というのはなかなか変えられないでしょ。それで失敗しちゃったんですよ。でも、昔の役人は偉かったですよ。尊敬もされていたけど。

山本 あらためて、先生が今一番興味をお持ちなことは何ですか？

諸井 歴史がいまでは面白いと思います。原価計算でも会計でも、制度がどのように移り変わっていくのか、その裏にどのような事情があったのか、とか、そういうのが面白いですよ。みんな時代の背景を持っているんだから、それと切り離しちゃ面白くないですよ。そういうのは年をとらないと、なかなかそういう境地にならないかもしれないけど。昔の会計というのは面白いですよ。例えば、企画院が、製造工業貸借対照表準則というのを出している。昭和 16 年 11 月。それを見ると、勘定式で、固定性配列法。固定資産が一番上にあって、だんだん流動資産になっていく。それに、貸方側が「資本負債利益」となっている。これおかしいでしょう？なんじゃこりゃと思うんだよね。だけど、理由があるんです。固定性配列法なんだ

けど、資産のトップは未払込資本金となっていて、その後に固定資産がくる。未払込資本金というのは、当時の商法の規定で額面は普通 50 円、四分割して払い込みができた。四分割と言うことは 12 円 50 銭。50 円のを 12 円 50 銭払って取得した。そうすると、資本金は 50 円、未払込資本金が 37 円 50 銭ということになる。もう 12 円 50 銭支払うと未払込資本金は 25 円。正味資本金は 25 円。これを明示するために、未払込資本金と資本金とをトップに持ってきているのです。そういう制度は戦後廃止されて、授權資本制になるわけです。それで、授權資本の枠を例えば 1 億円と決めると、その枠内であれば取締役会が自由に増資できる。そういう弾力性を従来は四分割性で認めていたわけですね。当時、財務会計はひどいのが多くて、財務諸表を見たって何が何だかさっぱりわからんというようなものが少なく

なかった。その中で、あの時代にしっかり会計をやっていたところは日本郵船ですよ。日本郵船は大株主が宮内庁なんですよ。だから、宮内庁に対して報告しないといけないから、きちんとしているんだよね。明治の初期からしっかりしている。同じ郵船関係でも大正期にイギリスのと比べても日本の方が進んでいる。そういうわけで非常に進んでいるのもあるし、なんだか訳のわからないものもある。そうした状況を記した研究書もあるので、論文を書くときもそういうのを読むと、また彩りが出るかもしれないですね。

山本 議論は果てしなく、尽きることがないと思うのですが、既に時間がかなり経っていますので、一旦、この辺で座談会を締めさせて頂きたいと思います。またこういった座談会を継続して行いたいと思っていますので、よろしくお願い致します。本日は大変にありがとうございました。

(完)